

# 中世栃尾城の寄居町であった大町の雁木の形成と変遷 豪雪地帯における雁木の発生と変遷に関する研究

深澤 大輔\*

(平成16年10月29日受理)

Formation and changes of the covered alley of Oomachi  
that were Yorii-machi of a middle age Tochio castle  
Research regarding the occurrence and changes of the covered alley  
in the heavy snowfall area

Daisuke F U K A Z A W A \*

At Oomachi undergoes the heavy snowfall that reaches 3 ~ 4 m, the eaves was build every several houses from the 16th century middle when Yorii-machi of the Tochio castle was formed while, and was securing traffic. This the model the street with a snowy country original covered alley was formed Genna period(1615 ~ 1623) in Takada ,and in Kanei 19 (1642) in Nagaoka. Covered alley in the store after the 18th century middle becomes prosperous inside prefecture all area while, and be reaching at present.

Key words: Covered alley , Heavy snowfall area , The middle age , Negoya community

## 1. はじめに

高田の雁木<sup>[1]</sup>は、松平忠輝侯が直江津の福島城を高田に移した慶長十九(1614)年の城下町建設後、雪が多く冬期交通に不便が多いので元和年間(1615 ~ 1623 年)に公儀地である道路上に「先進地のものを真似て造られた」とされている。また、長岡の雁木は、寛永十九(1642)年に「長岡藩が雁木通りを命令で造った」とされている。

本報では、その先進地とは、上杉謙信が幼少期過ごし、16歳の時に旗揚げして春日山城に入った栃尾ではなかったかとの仮説を立て、多雪地における雁木とは当初どのような形態であったか、その発生と変遷、現状について検証し、考察して見ることにしてみたい。

## 2. 豪雪の記録

図1は昭和20(1945)年の豪雪時の大町の様子である。三八豪雪と称された1963年の4m 28cm以外栃尾市中心部における豪雪の記録は殆ど残っていないが、大町にある栃尾消防署の30年間の平均年最深積雪深は1m 58cmである。これに対し、上越市の高田測候所のそれは1m 38cmである。従って、栃尾と高田はほぼ同じ積雪深の見られる豪雪都市である。参考までに高田における江戸時代以降、最高積雪深が3mを越した豪雪年を示すと、1665年(424cm)、1732年、1741年、1744年、1749年(485cm)、1751年、1752

\*

建築学科 教授(Department of Engineering and Architecture, Professor)

年，1783 年，1814 年(455cm)，1834 年，1841 年，1856 年，1886 年，1892 年，1927 年，1945 年，1986 年の如く 17 回あり，約 20 年周期で豪雪に繰り返し襲われている．



Fig1 Heavy snowfall situation at Oomachi , Showa 20 (1945)

### 3．雁木とは

雁木とは「雪深い地方（主として新潟県）で，町家の庇を長く張り出し，その下を通路としたもの」（広辞苑）と考えられているが，柳田国男氏は「越後では冬季人の通行を許して居る軒下をガンギといひ，市街地では是が一つの制度のやうになって居たが，村の孤立した家々にも此名があるのを見ると，古くはたゞ家の前の幾分高みになった部分を謂ったものと思はれる．土地によっては是に外縁を出して居る．（中略）越前北部では軒下をガンギ，（中略）、ガゲは其上を覆う庇のことだと謂って居るのも，起りは皆そこが雁木形に，やゝ平地よりも高くなって居たからかと思ふ．」<sup>〔2〕</sup>と述べている．高田や長岡の雁木は，近世の城下町整備の中で形成されたもので，栃尾における自然発生的な形で発達した初現形態とはかなり異なると考えられる．

### 4．栃尾城の築城と根小屋集落の形成

#### 4.1 大町・七日町・横町の形成

栃尾城は、南北朝期(1336-1392)に下野国宇都宮氏綱の臣芳賀禅可が進入し，拠点置いた<sup>〔3〕</sup>と伝えられ，天文 12(1543)年に若年の景虎（上杉謙信）が入城し，下郡制覇の旗揚

げをした．この頃に大町を中心として七日町・横町が根小屋集落として形成され，城下の寄居町となり，江戸期になると長岡牧野藩の栃尾組代官町へと発展し，明治期以降在郷町へと変遷<sup>〔4〕</sup>した．

#### 4.2 大町・七日町・横町の景観

Fig2 の洛中洛外図屏風/左隻(部分)<sup>〔5〕</sup>は，狩野永徳(1543～1590 年)が作成し，天正2(1574)年に織田信長が謙信に贈ったもので，室町時代末の京の都の風俗が克明に描かれている．尚，豊臣秀吉が天正18(1590)年に市中町割りを行ったため，京都の宅地割が短冊型になったとされていることから，この屏風絵はそれ以前の作と考えられる．



Fig2 Figure Folding screen at Rakuchu Rakugai, Tensyo 2(1574)<sup>〔5〕</sup>

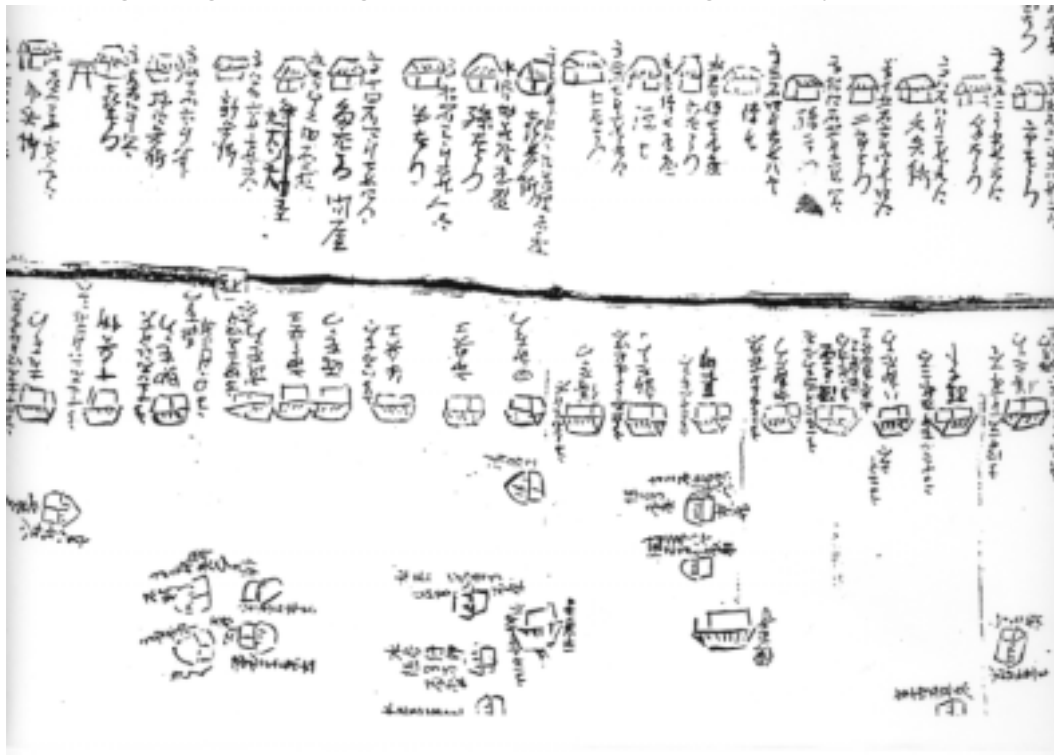


Fig3 Mikuni road Shiozawa stage,Tenna1(1681)<sup>〔6〕</sup>

Fig3 は、1681(天和1)年に三国街道の塩沢宿について描かれた部分図<sup>[6]</sup>である。これを見ると屋根は茅葺きであるが、家の向きは平入りと妻入りが交じり、家と家との間には隙間が空いている様子が分かる。

大町の原初形態は不明であるが、Fig2 と Fig3 から中世末の景観は、屋根は寄せ棟の茅葺きで、家と家との間は離れていたものと推察される。

#### 4.3 大町・七日町・横町における雁木の形成

ところで、栃尾でも農村部では太閤検地がなされているから、町家については間口の規制が行われ、京都と同じ頃に宅地割は短冊型となったものと推察される。この結果、栃尾市街地の絵図並びに現状の宅地割に見られるように短冊形に変わり、茅葺きの寄せ棟の妻入り形の家並みが連続する形になった。この過程で度々大雪に見舞われ、雪の下(中)を歩き回るのが便利な庇が間口一杯に付けられるようになり、自然発生的に雁木と呼ばれるものになったと推察される。このように推察すると、謙信時代には庇状のものがあつた、その下を大雪の時に飛び飛びに伝って歩ける箇所が見られたかも知れないが、雁木としてある程度の長さに連続するようになったのは、町家の間口の規制が敷かれて、2~3間程度の間口の短冊型の宅地割りになった時期以降と考えられる。この程度の長さになったために、お互い様という形で庇が連続することが可能となり、雁木が形成されたと言えよう。しかしながら、栃尾の場合は、近世の城下町のように都市計画がなされることはなかったため、整然とした雁木のある町並みになったのは、栃尾が栄え、谷内から滝ノ下に向かって市街地が形成された江戸中期以降のことと推察される。

### 5. 大町の呼称とその発達

大町の呼称は、大手(追っ手)に面する町であるとされている<sup>[3]</sup>が、大手の呼称は近世の城下町におけるもので、中世の山城の時代には見られない。

「町」は「市」の別称であることから、大町とは「大きな市の立つ町」の呼称と推察される。実際、大町は栃尾郷の中心に位置しており、「六斎市が開かれ、近世初頭から江戸時代前期において郷内の商品流通の主要な場であった。江戸前期において、栃尾町の商品流通を担っていたのは、六斎市の市場商人であったが、江戸中期、享保年間頃(18世紀前半)から店商いが盛んとなった。」<sup>[4]</sup>とされている。

### 6. 表雁木と裏雁木

#### 6.1 栃尾の町絵図に見られる表と裏の「・」

栃尾の町絵図は江戸時代の中期(延享5(1746)年)と後期(文久2(1865)年)のFig4<sup>[7]</sup>が残っている。中期のものは元絵図が紛失しており、詳細は良く分からないが、栃尾市史上巻に一部がトレースされ掲載されている。この120年間に、新町の現在雁木の無い部分に家並みが形成された程度で、殆ど大きな差は見られない。



Fig4 Tochio town design, Bunkyo2(1865)<sup>[7]</sup>

江戸後期の絵図を見ると、その最大の特徴は家の前後や前や後に「・」が打たれている箇所があることであるが、それが何を示しているものかは分からない。

#### 6.2 表雁木と裏雁木の存在

Fig5 は、三国街道の宿場町塩沢で明治 11(1868)年に町家の間取りとその室名称呼などを採取し記録したものである。これを見ると、右側の家の前と裏には「ヒサシ」が付いているが、左側の家ではほぼ同じ位置が「雁木」と記載されている。「ヒサシ」と「雁木」の区別は定かでないが、右側の「ヒサシ」と記載されている家の場合は、その脇に「便所」が付いており、通り抜けが出来ない形状であることが分かる。他に 4 例記載されているが、それらは左側とほぼ同様の形で、それらには「雁木」が付いていたと記されている。また、通り側（表）の雁木は「雁木」であるが、裏側のそれは「ウラ雁木」と記載されており、「雁木」には 2 種類あったことが分かる。

これから類推すると、Fig4 に見られる「・」の記号は、「雁木のある位置を示している」と考えると、町全体の構成について良く説明が付く。武家と商家、商家と職人家、などでは比率や並び方の点で上手く説明が出来ない。これを「雁木の位置を示すマーク」であることが事実とすると、当時、枳尾の雁木は道路に面した表側だけでなく、裏側にも発達していたが、それは全部整然と繋がっていた訳ではなかったことが伺える。

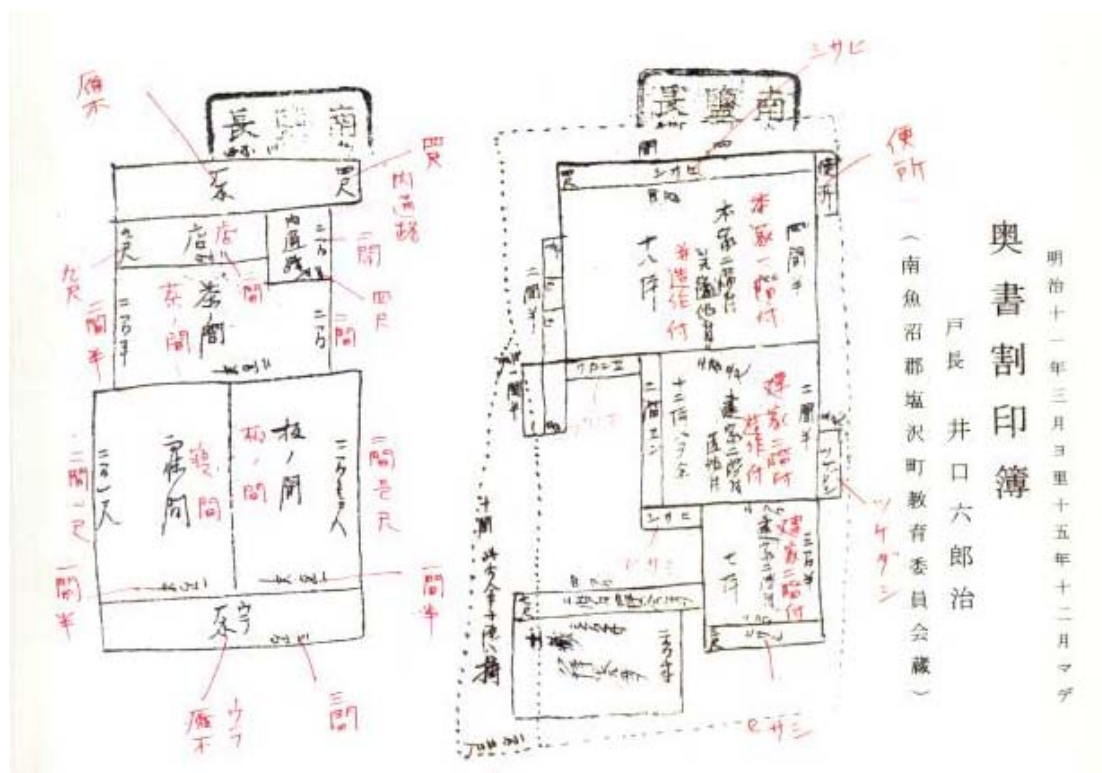


Fig5 Artisan's house with the eaves and covered alley in the table and the back<sup>[6]</sup>

## 7. 町家の表と裏

現在見られる町家は改造が進んでいるが、道路に面して店の間が設けられ、座敷・茶の間・勝手の如く順に奥の方に3～4室が並び、通り土間によってアプローチできる形式となっている。大きな家では更に通り土間が延長され、中庭を挟んで土蔵が設けられている。

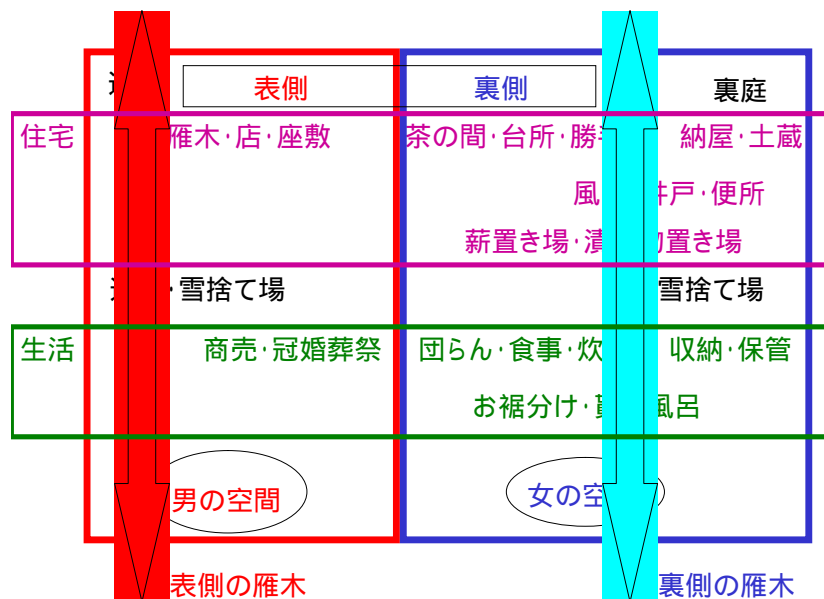


Fig6 Space structure of the artisan's house of Tochio

表側の雁木は商家や職人家において年中の商いをスムーズに行う上で多雪地では必須のものであった。これに対し、裏側の軒先や庇付近（大きな家の場合には土蔵や納屋を含む）には、燃料の薪を山積みし、漬け物樽を所狭しと並べていた。大町には4か所井戸があり、中庭には風呂や便所が設けられ、貰い風呂の習慣もあった。このような日常生活の中で、3mを越す豪雪年となると、表側では左右の雁木同士を結ぶトンネルが掘られ、通行が確保された。裏側では越冬用に蓄えていた燃料や漬け物類を、手前から順に取り出し、生活する姿が一般で、隣の裏庭に行く時には先ず表に出て雁木を通り、隣の家の通り庭を歩いてアプローチした。しかしながら、気の合った隣近所の数軒単位で冬場の通行を夏場と同様に軒先ないし庇を利用して確保し合っていた箇所があったと絵図から推察される。

## 8. 町家の軒高の変遷

軒高は、古いものは7尺前後と低いが、次第に高くなって9尺となり、最近の平屋では12尺を超える程になっている。平屋であったものが2階建てとなり、現在は3階建てや高床式住宅も見られる。木造3階建ては昭和30年頃の建物が多く、高床式住宅は昭和60年以降が多い。町家の2階建て化はいつ頃起こったのかは不明である。高田の場合、寛文5(1665)年の大雪(1丈4尺(4.2m))の時、「この下に高田あり」の高札が立てられたと伝えられているから、当時は全部平屋であったと考えられる。栃尾の大町の場合、明治後期の写真<sup>[8]</sup>では全てが2階建てとなっている。



Fig7 Situation of Oomachi at the Taisyo Era (1912-1926)<sup>[8]</sup>

文化・文政期(1804-1828)頃に現在の民家形式の原型が一般化している。中越地域一帯は文政11(1828)年の三条地震(M 6.9)で大きな被害を受けているが、これを契機に被害の少なかった妻入り船桧造り形式の町家が見られるようになり、石置き屋根の2階建ての家づくりもそれ以降に進み、大正時代にはFig7のような景観を呈するようになった。

## 9. 土蔵の発達

絵図を見ると、表に面する母屋の規模で建物が描かれ、そこに屋号が付されている。現在の町家の内、小さな家は母屋だけ、母屋と裏庭の構成であるが、大きな家の場合、2 列型の母屋・裏庭・渡り廊下・土蔵という構成を採っている。このように裏側に廊下が延び、土蔵が建てられるようになったのは、農家において中門と呼ばれる増築が盛んに行われたと同じ明治中頃と推察される。これによって、それまで裏側でも庇を連続させ冬の通行を確保していた姿が見られなくなったと考えられる。

## 10. 現在の大町の雁木

現在の大町の雁木通りの家並みに見られる建物は、明治期のものは少なく、大正 15(1925)年の栃尾大水害以降に建てられた昭和初期から戦前の建物が古いものとなっている。昭和 30 年頃に繊維の好景気の時代があって建て替えられ、その後も徐々に建て替えられているが昔ながらの景観は良く保存されている。表通りの雁木の他に、小路に入った所やその奥、昔の長屋の前にも数軒で構成された雁木が見られる。

## 11. 考察（まとめ）

栃尾城下の大町は中世の山城の根小屋集落から発達したもので、近世の城下町のように都市計画的に整備されたものではなかった。従って、高田や長岡のように整然とした雁木のある町並みが形成されたのは、江戸時代中期以降と推察される。しかしながら、大町は 3～4 m にも達する豪雪に見舞われる中で、栃尾城の寄居町が形成された 16 世紀中頃から自然発生的な形で数軒毎に母屋の表側や裏側に庇を設け、通行を確保していた。これを手本にして近世初期の城下町造りの中で高田では元和年間(1615～14623)に、長岡では寛永十九(1642)年に、雪国独特の雁木のある町並みを形成させた。これが 18 世紀中頃以降、店商いが盛んになる中で、県内全域に拡大して現在に至っていると整理できる。

## 参考文献

- [1] 木村雅俊：高田の雁木；歴史的建造物の保存と活用に関する調査報告書，上越市創造行政研究所，平成 14 年
- [2] 柳田国男：居住習俗語集；国書刊行会，昭和 52 年
- [3] 栃尾市：新潟県の地名；日本歴史地名体系 15，平凡社，1990 年
- [4] 栃尾市史編集委員会：栃尾市史上巻；栃尾市，昭和 52 年
- [5] 狩野永徳：洛外洛中図屏風ノ左隻；よみがえる上杉文化，新潟県立歴史博物館，平成 13 年
- [6] 南魚沼郡塩沢町歴史資料；塩沢町教育委員会蔵，平成 13 年
- [7] 栃尾町絵図；栃尾市教育委員会蔵，文久 2(1865)年
- [8] 写真集ふるさとの百年 - 栃尾・見附・南蒲原 - ；新潟日報事業社，昭和 56 年